

大麦の脱芒性ならびに脱粒性に関する研究 II. 脱芒性ならびに脱粒性の検定方法と品種間差異について

桐山 毅・田谷省三・前田浩敬・池田和彰

(九州農業試験場)

KIRIYAMA, T., TAYA, S., MAEDA, H. and IKEDA, K.

Studies on the Awn and Grain Shattering Character in Hulled Barley
II The varietal difference of awn and grain shattering of barley and the techniques for testing.

第I報に引き続き、小型脱穀機による検定法について試みるとともに、採種用脱穀機による結果と一致するかどうかの検討も試みた。また、6条皮表150品種を用い、品種間差の検定を行なった。

A 検定方法

材料

第I報に準ずる。

方法

機 種	周速度(m/min),処理時間	調査穂数	調査時期	反 覆
L K 式	A (326) ; E (823)	5 穂	出穂後 35日 ・ 45日	2
白川式	2.5秒, 5秒 (722)			
採種用 脱穀機	8 4 4	—	45日	—

上記の方法により処理した各々の材料について、脱芒程度、脱粒性程度ともに、第I報に準じて調査した。

結 果

1) 脱芒性については、図1で明らかなように、第I報と同じく、白川式2.5秒で、各品種5穂づつ2反覆で脱穀し、完全脱芒粒率により品種間差の検定が可能のようである。

2) 脱粒性についても、図2に示したとおり、第I報と同じく、L K 式E (厳密にはAも)、あるいは白川式2.5秒で脱穀し、穂軸及び枝梗残粒数と脱粒数の比率(穂軸・枝梗残粒率)により、品種間差の検定が可能のようである。

3) 採種用脱穀機による結果は図3並びに図4に示した。小型機による結果とよく一致し、脱芒性、脱粒性ともに、小型機により簡便に品種間差の検定

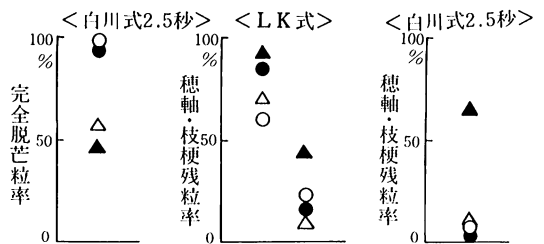
ができるようである。

4) 以上の結果にもとづいて、検定方法についてまとめると次のとおりである。

種 類	周速度または 処理時間	調査 穂数	調 査 時 期	反 覆
脱芒性の 検 定	白川式: 2.5秒	5	出 穂 後 35 ~ 45 日	2
脱粒性の 検 定	L K 式: E (A) 白川式: 2.5秒	5	出 穂 後 35 ~ 45 日	2

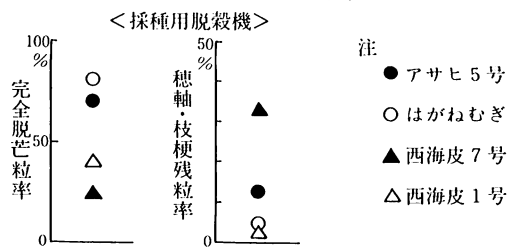
B 品種検定

6条皮表150品種について、Aの検定方法の結果より、最良と思われる方法、即ち1品種5穂、2反覆、白川式2.5秒廻転により、脱芒性並びに脱粒性の検定を行なった結果、顕著な品種間差が認められた。



第1図 脱芒性程度

第2図 脱粒性程度



第3図 脱芒性程度

第4図 脱粒性程度

注 ● アサヒ5号
○ はがねむぎ
▲ 西海皮7号
△ 西海皮1号